

「誰にもやさしい博物館」への取り組み ～“ユニバーサル・ミュージアム”を目指して～

おくのかよこ
奥野 花代子 (学芸員)

はじめに

最近の博物館では、建物の設計や設備だけでなく、展示手法も一段と工夫されているとともに博物館活動も多彩に展開されて、より親しみやすくなっています。加えて、情報機器や伝達手段が著しく進歩したことにより、博物館へのアクセスも容易になり、利用しやすくなりました。

当館も建設計画段階からバリアフリーの考え方が導入されて、エレベータやエスカレータ、スロープ、障害者用トイレ、授乳室や救護室等が設置され、誘導用ブロック（注1）も敷設されています。また、福祉車両駐車スペース、貸出用の車椅子やベビーカーも用意されています。入館料金も障害者と介助者、高校生以下と65歳以上の方は無料です。平成

19年7月から20年3月までは、毎月第一日曜日が「ファミリー・コミュニケーションの日」とされ、18歳未満の子ども連れの家族での観覧^{かんらん}が無料となりました。当館の友の会会員や箱根フリーパス、富士箱根フリーパス、かながわトラストみどり財団会員などにも割引制度が適用されています。

平成7年3月の開館以来、開かれた博物館として様々な活動を行い、「誰にもやさしい博物館」への方策に心がけてきました。その主な取り組みを次に紹介します。

「誰にもやさしい博物館」への取り組み

当館には、触ることのできる展示物がある（表紙写真）ことから目の不自由な来館者にも好評です（図1、2）。

当然のことですが、障害のある人にはいりよ配慮された博物館は、すべての人が楽しめる博物館につながります。さらなる展示の学習を補完するために、開館1周年を記念して初代館長とアナウンサーとの対話形式の「音声ガイド」1号機（平成8年）を、翌年にその続きを解説した2号機を製作しました。この「音声ガイド」は開館後の計画のため、目の不自由な来館者が一人で利用するには難しく、「誘導・案内ボランティア」（平成10年導入）の支援を得ています（図3）。ボランティアの中には点字の作成を得意とする方もおり、傘立てやコインロッカーとその鍵、触れる展示物のラベルや解説（図4）の他、レストランメニューの点字版の作成などにも協力をいただいています。

ちなみに、来館者向けの「展示解説ボランティア」活動は、平成15年度から開始されています（図5）。

これらの取り組みを模索・試行する過程で、バリアフリー思考からユニバーサルデザイン（注2）の発想へと発展しました。

一方で、「全国の博物館における視覚障害者の対応に関するアンケート調査」（平成9年）や「全国の盲学校の博物館利用に関するア



図3 「誘導・案内ボランティア」の案内で、恐竜の骨格標本に触る目の不自由な生徒。生徒が首から下げている黄色のカバーのものが「音声ガイド」1号機。



図4 展示物の解説と同様の内容を表して貼付した手製の点字シート。



図5 子どもたちにも展示をわかりやすく説明する「展示解説ボランティア」。

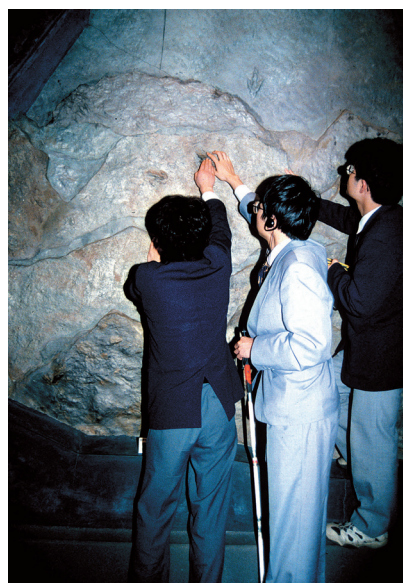


図1 恐竜の足跡化石に触る、目の不自由な生徒たち。



図2 恐竜の骨格標本に触る、盲導犬を伴った目の不自由な来館者。

ンケート調査」（平成10年）等を実施し、博物館の現況を把握しました。

こうした調査・研究を活かして、開館三周年記念「ユニバーサル・ミュージアムをめざして～視覚障害者と博物館」と題したシンポジウムを開催（平成10年3月）し、翌年に、これをまとめた論集を刊行しました。題名の“ユニバーサル・ミュージアム”の名称は、ユニバーサルデザインの概念^{がいねん}を採り入れ、当館がこの行事を計画する際につくった言葉です。

最初からユニバーサルデザインで満たすことや、理想的な環境を整えることは難しく、当館では、一つ一つのバリアを改善、クリアしながら、バリアフリーの実績を積み重ねていくことにしました。

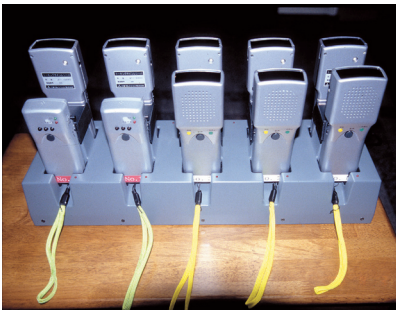


図6 「トーキングサイン・ガイドシステム」の受信機の保管状態。手前の左側2機は解説機。

平成10年度から12年度には文部科学省の委嘱事業「科学系博物館ネットワーク推進事業」の中で、赤外線による音声歩行案内・解説装置の「トーキングサイン・ガイドシステム」(図6)をメーカーと共同で開発しました。天井や壁に取り付けた「発光部」と、利用する人が手にする「受信機」、案内する人が持つ「解説機」からなり、日本で初めて設置され、エントランスホールで試行されています。ユニバーサルデザインの理念で考案されたこの装置は、施設等で赤外線を利用した音声案内を導入する際に、参考にされることが多いです。

ユニバーサルデザインには決まった例がなく、最も使いやすいものを創り、多くの人が活用することによって、さらに良いものが導き出されていくことでしょう。

「ユニバーサル・ミュージアム」を目指して

近年、国のバリアフリー化に関する法整備なども行われ、交通機関や建物等の環境整備が進められています。

神奈川県においても『神奈川県福祉の街づくり条例』(平成8年4月)が施行され、さらに『情報バリアフリー』(平成13年12月)や『カラーバリアフリー』(平成16年3月)のガイドラインが示され、当館でもこれに則した対策を考慮する必

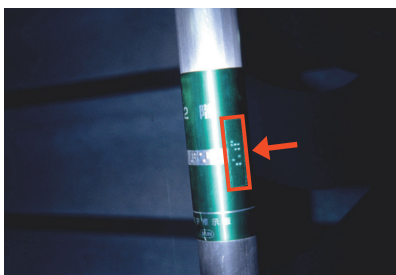


図7 階段の手すりに貼付された規格品の点字シートに追加して、指先の触れる部分に貼付した手製の点字シール。

要性ができました。

そこで、あらためて、平成16年度に“ユニバーサル・ミュージアム”を目指して、すべての来館者が楽しみ、感動を共有していくための快適な施設づくりに向けた職員によるユニバーサルデザイン検討ワーキンググループが組織されました。ワーキンググループは【障害のある人への方策を第一に考え、健全者と等しく共通に利用できるものを基本として誰にでも適切なサービスが行えるよう配慮すること】を方針に掲げました。これにそって課題を整理し、緊急度が高く、大がかりな工事と莫大な費用を要しない箇所から取り組むことにしました。その改善部分を以下に紹介します。

- ① 展示室内の階段とエスカレータの始めと終わりに「警告ブロック」を敷設しました。これにより階段を踏みはずす危険性を回避しました。
- ② 正面玄関に敷設されていた「誘導用ブロック」の一部を撤去しました。これは地下駐車場に向けて敷かれていたもので、誤誘導を防ぐためです。撤去したことにより、総合案内への導線が判りやすくなりました。
- ③ 階段の手すりに点字表示を取り付けました。点字表示は、手すりを握った時に指先が触れる部分が判りやすいと考え、規格品に加えて、手製の点字シールを指先の触れる部分に貼付しました(図7)。
- ④ 床から150cmの位置にある鋭角の展示構築物の先端部分に衝突による怪我防止用のソフトカバーを取り付けました(図8)。
- ⑤ エントランスホールに設置されているガイダンス映像には、開館当初から手話表現が組み込まれていますが、さらに、文字情報を追加しました。
- ⑥ ホームページの利用案内に、バリア

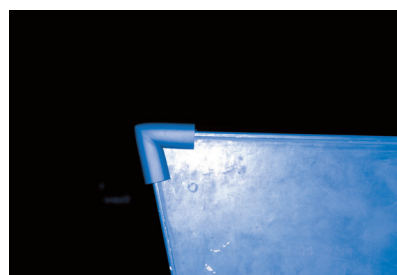


図8 鋭角の展示構築物の先端部分に取り付けたソフトカバー。



図9 「誘導用ブロック」の上に置かれた子どもたちのリュックサック(大阪府の公園にて)。

フリーサービスの項目を追加するとともに、キーボードでも操作でき、音声読み上げソフトにも対応できるように配慮しました。

おわりに

さまざまな研修会を通して、誘導用ブロックの理解を含めて「バリアフリー化推進」に努めていますが、終了後に「誘導用ブロックは目の不自由な人が使用するものと解っていたが、そのブロックに各々の意味があることを知らなかった。今後、自分自身も子どもたちにも注意していきたい」という感想が寄せられています。

そのきっかけとなる一例が図9で、誘導用ブロックの上にリュックサックが置かれています。「誘導用ブロック」は目の不自由な人の大切な情報源です。引率者が理解していたら、このような事は起こらなかったでしょう。

最後に、「ユニバーサル・ミュージアム」を目指した取り組みで大切なことは、すべての来館者に気持ちよく利用していただくための姿勢や工夫と思います。

当館も含めて多くの博物館で、今後、そうした取り組みが、一層はかられていくものと期待されます。

*注1.「誘導用ブロック」には、「誘導ブロック」と「警告ブロック」の二種類があります。「誘導ブロック」は、“進め”の意味を示す線状のものです。「警告ブロック」は、一般に点字ブロックと呼ばれている点状のものです。“止まれ”の意味を示すほか、「何らかの意味を持った場所」を示すときにも用います。例えば、案内板のある場所や階段の始めと終わり、横断歩道の入口、エレベータの場所などです。

*注2.「ユニバーサルデザイン」とは、できる限り最大限、多くの人に利用可能であるように製品、建物、身の回りの生活空間などをデザインすることです。つまり、障害のある人のためだけではなく、高齢者、妊婦、小さな子どもを含む、すべての人に利用しやすい環境を目指したデザインです。